

ブルガリア語及びマケドニア語における 目的語の接語重複について —標準語と方言、文法化の観点から—

菅井 健太

[summary]

Clitic doubling of objects in Bulgarian and Macedonian
—From the viewpoint of grammaticalization and dialectology—

SUGAI Kenta

This article deals with clitic doubling (henceforth CD) of objects in Bulgarian and Macedonian. Firstly, this article aims to examine CD in both Macedonian and Bulgarian literary languages from the viewpoint of grammaticalization, comparing how much and how CD is grammaticalized in each language. Secondly, by illustrating the areal distribution of CD in the dialects we try to show that the degree of grammaticalization differs considerably in each language. Finally, considering the geographical distribution of CD among the Macedonian and Bulgarian dialects, we refer to the role of language contact as one of the main factors for grammaticalization of CD.

キーワード : Bulgarian, Macedonian, clitic doubling of objects, dialect, grammaticalization, language contact

0. はじめに

ブルガリア語とマケドニア語は、スラヴ語派中で南スラヴ語群に分類され、特にこの二つの言語は南スラヴ語群中でも近い関係にあり、いわゆる方言連続体 (dialect continuum) を成す。この二つの南スラヴ語には、目的語の接語重複 (clitic doubling of objects) と呼ばれる現象が知られる。これは、直接目的語あるいは間接目的語の役割を担う人称代名詞非接語形 (non-clitic form) やその他名詞句を、同一指示の人称代名詞接語形 (clitic form) を用いて、同一文中で二重に標示する現象のことを言う。非常に近い関係にある両言語であるが、この現象の表れに関しては大きな差異が存在する。本稿では、ブルガリア語とマケドニア語における同現象の差異に着目し、それを文法化の観点から考察する。そして、それをもたらす要因

について、標準語のみならず方言のレベルでも考察する。

本稿の構成は次の通り。1. でブルガリア語及びマケドニア語の標準語における目的語接語重複の概要を示し、両者の差異を指摘する。2. では、目的語の接語重複を文法化の観点から考察する。3. では、方言での実態に着目する。標準語と異なり方言では文法化の程度の違いから、様々なヴァリエーションがブルガリア語とマケドニア語の言語域に分布していることを確認し、その分布をもたらした要因としての言語接触について指摘する。4. で、本稿での議論をまとめ、今後の課題を提示する。

1. イントロダクション

ブルガリア語とマケドニア語は、方言連続体を成し、極めて近い関係にあるが、目的語接語重複の表れに関して、少なくとも標準語のレベルでは大きな隔りがある。まずは、それがどのようなものであるかを見てみたい。同じことを述べているマケドニア語 [MK] とブルガリア語 [BG] の文を比べてみよう¹。

- (1) a. Мѹ џо давам моливот на момчето. [MK] (Friedman 2008: 36)
 him.DAT.CL. it.ACC.CL. give.PRES.1.SG. pencil+the DM. boy+the
- b. Давам (мѹ џо) молива на момчето. [BG]
 give.PRES.1.SG. him.DAT.CL. it.ACC.CL. pencil+the DM. boy+the

「(私は) その男の子にその鉛筆を与える。」

この時、マケドニア語は直接目的語の моливот「その鉛筆」も間接目的語の на момчето「その男の子に」の両方とも人称代名詞接語形による二重使用が義務的であるのに対して、ブルガリア語はこの時二重使用が可能ではあるが、通常はなされない。マケドニア語とブルガリア語の間では、目的語接語重複の実現に際してこのような差異がある。次に、それぞれの標準的な文法書においては、接語重複についてどのような記述がなされているかを見ていこう。

まずマケドニア語については、標準マケドニア語 (македонскиот литературен јазик) の文法書として知られる Конески (1967)、及び標準マケドニア語 (македонскиот стандарден јазик) の統語論に詳しい Минова-Ѓуркова (2000) を見る。

Конески (1967: 261-263) は、「[直接] 目的語の位置に、後置定冠詞付きの名詞（あるいは、固有名詞のように別の手段で定である名詞）が立つ時は、動詞に隣接した位置には、同じ役割として対応の人称代名詞の短形も必ずおかれる」と述べ、その例外はいくつかの決まった表現や詩において見られ、それ以外では一般的には「言語 [規範] の重大な違反」と感ぜられるという。さらに、定冠詞を伴わない名詞の重複の存在についても述べている。Конески (1967: 266) は、間接目的語の場合について「人称代名詞の [二重] 使用は、定冠詞を持たない名詞の時も規則的である」と述べ、「この場合に人称代名詞を用いないことは極めてまれとなるであろう」とさえ指摘している。

Минова-Ѓуркова (2000: 206-215) は、標準マケドニア語における接語重複についてより詳細に述べている。基本的には、Конески (1967) と同じで、直接目的語は定の名詞句である場合には規則的に重複することを指摘する。さらには、еден や некој「ある」を伴い、不定である直接目的語の重複についても、比較的まれであるが用いられることも指摘する

(Минова-Гуркова 2000: 211)。故に、Минова-Гуркова (2000: 212) は直接目的語の接語重複について、「定冠詞か、あるいは定を標示するもの（例えば、指示代名詞など）、あるいは不定を標示するもの（еден, некој「ある」）を持たずに用いられる名詞句は、直接目的語の機能を持つとき、人称代名詞短形で重複されることはない」と総括している。一方、「間接目的語は、直接目的語よりもより規則的に重複される」ことを指摘し、еденを伴い不定となる名詞句の場合には直接目的語の場合と比べて重複があることがより一般的であったり、その他でも、直接目的語では重複されえないような名詞句（例えば疑問詞 кој「誰」や様々な代名詞）の場合でさえも重複されうることが述べられている (Минова-Гуркова 2000: 214-215)。

以上、標準的な文法書の記述にあるように、少なくとも標準マケドニア語では、目的語の接語重複は一般にかなり義務性が高いという特徴があるといえよう。

今度は、ブルガリア語に目を向けてみよう。科学アカデミー発行の現代標準ブルガリア語の文法書である Попов et al. (1983: 187) によれば、接語重複は「口語に特徴的な統語的現象」であり、また接語重複を使用することは「文章語における口語的な要素を強める」ことになるという。Мирчев (1963: 224) は、文章語では普通避けられるとさえ述べている (cf. also Leafgren 1997)。その一方で、Попов et al. (1983: 187-188) は、格変化を失ったブルガリア語は、語順が比較的自由であることもあり、主語と目的語の区別があいまいになることもあるが、目的語の接語重複がその曖昧さ軽減に役立つことも同時に指摘している。これに加えて、ブルガリア語の目的語接語重複に関する多くの先行研究 (cf. Цивьян 1965: 34, Лопашов 1978: 28, Маслов 1982: 304-305, Franks & King 2000: 251 etc.) が示すように、ブルガリア語では目的語接語重複の使用は一般的に言って随意的であることが知られる。

以上の事より、ブルガリア語では、目的語の接語重複の使用は一般的には口語に特徴的なものであり、文章語では避けられる傾向にある。また、目的語接語重複の実現は随意的な特徴がある。

以上に見るように、マケドニア語とブルガリア語の標準語を比較すると、両言語の間には目的語接語重複の実現や用法の点で大きな違いがある。それはすなわち、マケドニア語では、目的語接語重複は全般的に義務的な様相を呈し、それが文法的に条件づけられているのに対して、ブルガリア語では、それが文法的に条件づけられることはほとんどなく²、一般的には随意的な特徴を有する。また、接語重複自体は、口語においてより特徴的な現象で、文章語のようなより高い文体においてはその使用がまれとなる傾向がある。

それでは、ブルガリア語における目的語の接語重複が文法によって条件づけられていないのであれば、一体何によって条件づけられているのであろうか。この疑問には多くの研究者が取り組んできた。近年になって、Асенова (2002: 108) や Guentchéva (1994: 159) などが、目的語接語重複が「目的語をトピック化するための統語的な手段」であるという結論に至っており、多かれ少なかれコンセンサスが得られている。さて、この事実が意味するのは、接語重複される目的語は通常トピック³となるということになり、逆にそうでない目的語は接語重複されえないという事になる。このことから、ブルガリア語における目的語接語重複は、一般的に語用論的に条件づけられている現象であるということができ、また、目的語接語重複の「随意性」は、このこと故にもたらされるとも言えよう。つまり、文法によってではなく、話者のトピックとして表示するかどうかの意向によって接語重複の有無が決定されるた

め、一見「随意的」に実現するようにみられるのである。標準ブルガリア語における目的語接語重複の実現に際して関与してくるこの特徴は、トピックであるかどうかに関係なく広く接語重複がなされる標準マケドニア語とは大きく異なる点であると言えよう。

さて、バルカン諸語における同現象の著名な研究で知られる Лопашов (1978: 124) は、ブルガリア語及びマケドニア語を含むバルカン諸語における目的語接語重複は基本的に同一の現象であり、言語間でみられる差異は文法化の程度の違いによりもたらされることを指摘している。つまり、標準マケドニア語と標準ブルガリア語の間に見られる目的語接語重複の用法に関する差異もまた、文法化の程度の違いによってもたらされていると考えられる。以下、我々は文法化の観点から、マケドニア語及びブルガリア語における目的語接語重複について分析していく。

2. 接語重複と文法化

2.1. 文法化について

本稿では、文法化について、Heine & Kuteva (2005: 14) に従い、次のように定義する。すなわち、「文法化とは語彙的な形式から文法的な形式へ、文法的な形式からより高度に文法的な形式への発展のプロセス」。Heine & Kuteva (2005: 15) によれば、ある要素が文法化しているかどうかを判断するにあたって次の (2) にあるような4つのパラメーターが有益であるという (cf. 野町 2011: 33)。

(2) 文法化のパラメーター (Heine & Kuteva 2005: 15)

- a. 拡張、すなわち言語表現が新たな文脈で用いられるときに、新しい文法的意味が台頭すること
- b. 脱意味化 (あるいは「意味的漂白」)、すなわち意味内容の喪失 (あるいは一般化)
- c. 脱カテゴリー化、すなわち単語あるいは文法化の程度が低い形式が形態統語的な特徴を消失
- d. 浸食 (あるいは「音声的弱化」)、すなわち音声的実体の消失

また、文法化の前提条件は、ある形式や構文が新たなコンテキストの中で用いられるようになることであり、その新しいコンテキストは新しい意味的な解釈を伴いやすいので、新しい (文法的な) 意味の台頭 (2a) もまた文法化の前提条件になるという。それに対して、(2b) ~ (2d) のパラメーターは、(2a) 拡張によりもたらされた形態統語的な産物であり、いずれももともとある言語形式が持っていた特質の喪失が関与する。具体的には (2b) は意味内容の喪失、(2c) は形態統語的な特徴の喪失、(2d) は音声的実体の喪失である (Heine & Kuteva 2005: 15)。ただし、ある言語形式が文法化を経験する際に、これらのパラメーター全てが関与するわけではない。

本章では、上記文法化の特性や、それをはかるパラメーターなどをもとに、マケドニア語とブルガリア語における目的語の接語重複の文法化について検討する。

2.2. 接語重複と文法化

最初に、前節で述べたことと関連して、目的語接語重複が関与するパラメーターを見て

いきたい。Heine & Kuteva (2005) は、バルカン諸語に見られるいわゆるバルカニズムを文法化の観点から分析しているが、その中で目的語接語重複も取り上げている。Heine & Kuteva (2005: 192-194) によれば、代名詞の形式が、それが持つ直示的及び語用的な要素との関連性を一層失う上記のパラメーター中の (2b) 脱意味化、及び代名詞から統語的にかなり予測可能な一致標識への変化を伴う (2c) 脱カテゴリー化が見られるという。いわば、代名詞というより語彙的な形式から、単なる一致標識というより文法的な形式への発展がみられるものと考えられるのである。とりわけ、文法化が進んでいると考えられるマケドニア語の場合について中心に、実際に人称代名詞接語形がより文法的な形式に発展しているかどうかについて検討していきたい。

2.2.1. 人称代名詞接語形の文中での位置

まず、人称代名詞接語形が文中でとる位置について考えたい。マケドニア語とブルガリア語を比較した際に、両者の間で違いが見られる。ブルガリア語は、人称代名詞接語形は基本的には動詞に隣接した位置に現れ⁴、通常はその動詞と一つの韻律的なまとまりを成す。ただし、動詞に対して先行した位置と後続した位置の両方を占めることができ、そのどちらを占めるかは、動詞と人称代名詞接語形のまとまり（動詞句）が文中のどの位置を占めるかによる。一般的には、動詞句中で人称代名詞接語形は動詞に先行した位置を占めるが、エンクリティックな特性を持つブルガリア語の人称代名詞接語形は文頭の位置を占めることができない。したがって、動詞句が文頭におかれるような場合には、人称代名詞接語形は動詞に後続する位置におかれる。次の例を見てみよう。

- (3) a. *Вера ми _____ го даде вчера.* (Franks & King 2000: 63) [BG]

Vera me.DAT.CL. it.ACC.CL. give.AOR.3.SG. yesterday

b. *Вчера ми го даде Вера.*

c. *Вчера Вера ми го даде.*

d. **Вера ми го вчера даде.*

e. **Ми го даде Вера вчера.*

f. **Вера даде ми го вчера.*

「ヴェーラは昨日私にそれを与えた。」

この時、文法的に正しい (3a) ~ (3c) では、人称代名詞接語形の固まりは動詞に対して隣接しており、また文頭には別の要素があり、動詞句は文頭の位置を取らないので、人称代名詞接語形は動詞に先行する位置をとっている。一方で、(3d) では人称代名詞接語形の固まりが動詞に隣接しておらず、(3e) では人称代名詞接語形が文頭の位置を占めており、(3f) では動詞句自体が文頭を占めるわけではないのにもかかわらず、人称代名詞接語形が動詞に後続しているため、それぞれ非文法的となる。ブルガリア語では、この人称代名詞接語形の配置の規則は、命令形などの非定形動詞 (non-finite verb) など動詞のほとんどあらゆる形態に及ぶ。ただし、副分詞の場合のみ異なった現れ方をしうる。人称代名詞接語形と副分詞が成す句が文頭におかれられない場合であっても、人称代名詞接語形が動詞に対して後続することがあり、またそれが好まれさえるという (Franks & King 2000: 65)。

他方、マケドニア語は、人称代名詞接語形は動詞に隣接した位置を占める点ではブルガリア語と同様であるが、人称代名詞接語形は基本的にプロクリティックな性質を有し、少なくとも定形動詞 (finite verb) については常に動詞に先行した位置をとる。この点でマケドニア語はブルガリア語と大きく異なる。一方で、非定形動詞の場合にはこれに従わない。例えば、命令形の場合、人称代名詞接語形は動詞に後続するのが一般的である。ただし、否定の助詞 *не* を伴って否定命令となる場合には、命令形の動詞に対して先行した位置を取りうるが (4a)、ブルガリア語と異なり、そうでなくてもよい (4b)。次の (4) を見てみよう。

- (4) a. *He* *ми* *го* *носи!* [MK, BG] (Franks & King 2000: 83)
 not me.DAT.CL. it.ACC.CL. bring.IMPV.2.SG.
 b. *He* *носи* *ми* *го!* [MK, *BG]
 not bring.IMPV.2.SG. me.DAT.CL. it.ACC.CL.
 「私にそれを持ってくるな。」

(4a) では、人称代名詞接語形の固まりが命令形の動詞に先行しているが、文頭には否定の助詞 *не* があるため、ブルガリア語でも可能な語順である。一方で、(4b) のように否定の助詞 *не* があるにもかかわらず、命令形の動詞に後続した位置を人称代名詞接語形が取るというのはブルガリア語では非文法的な語順だが、マケドニア語では十分に可能な語順である。

ブルガリア語とマケドニア語における人称代名詞接語形の文中で占める位置についての検討を行ったところ、両者では次の点で大きな差異がみられた。それはすなわち、ブルガリア語の人称代名詞接語形は、動詞形態に対して先行することも後続することも可能であるが、それを決定する要因はその人称代名詞接語形が文中で占める位置である。その一方で、マケドニア語の人称代名詞接語形は、一般的には定形動詞に対して先行するが、非定形動詞の場合には後続する語順を取るのが通常である。つまり、ブルガリア語の人称代名詞接語形の動詞に対する語順は文中での位置により決定されるのに対して、マケドニア語のそれは文中での位置ではなく、動詞そのものの形態によって決定されるのである。言い換えれば、ブルガリア語の場合はより統語的な要因によるのに対して、マケドニア語の場合はより形態的な要因によって、人称代名詞接語形の動詞に対する位置が決まることになる。

2.2.2. 他動詞性の標示

マケドニア語及びブルガリア語では一般的に、他動詞と自動詞の区別は、形態的に標示される。一般的には自動詞の方が、再帰代名詞対格形由来の *се* という形態的な標識によって、明示的に示される。しかし、実際には必ずしもそうではない。というのも次のブルガリア語の例を見てみたい。

- (5) a. *Спря* *трамвая.* (Aronson 2007: 18)[BG]
 stop.AOR.3.SG. street_car+DEF.OBQ.
 「(彼は) トラムを止めた。」
 b. *Трамваят* *спря.*
 street_car+DEF.NOM. stop.AOR.3.SG.
 「トラムが止まった。」

この時、(5a)と(5b)は全く同じ動詞形態をとっているが、(5a)では他動詞、(5b)では自動詞として用いられている。これは、主格と斜格を形態的に区別する男性形の後置定冠詞の存在により明らかである。(5a)では、主語は明示的に標示されていないが、трамвай「トラム」は斜格の後置定冠詞をとっており、動詞 *спря* の目的語であることが形態的に示されている。(5b)では主格の後置定冠詞をとっているために、主語は明らかにトラム自体である。つまり、*спря* という動詞は *се* という形態的な標識を伴うことなしに、他動詞としても自動詞としても用いられている事になり、他動詞と自動詞の区別が形態面で曖昧となっていると考えることができる⁵。同様のことはマケドニア語でもいうことができ、例えば Конески (1967: 357) は、「他動詞と非他動詞間の境界の揺れは、我々の現代語においてかなり進んでいる」とさえ述べている。ただし、これは全ての動詞に及ぶわけではない。いずれにせよ、この「曖昧さ」は場合によっては大きな問題をもたらす。上記 (5) のブルガリア語の場合には、主格と斜格を形態的に区別する後置定冠詞の存在によって他動詞か自動詞かの区別がなされ、解釈の二重性は生じない。ただし、ブルガリア語であっても、後置定冠詞で格の形態的な区別をするのは男性形のみであるし、ましてや後置定冠詞を取らない名詞句ではその区別は曖昧となってしまう。

さて、次のマケドニア語の例を見てみよう。

- (6) a. *Ja* *започна* *работата.* [МК]
it.F.SG.ACC.CL. start.AOR.3.SG. work.F.SG.+DEF.F.SG.
「(彼は) その仕事を始めた。」
b. *Започна* *работата.*
start.AOR.3.SG. work.F.SG.+DEF.F.SG.
「その仕事が始まった。」

(6)において用いられている動詞 *започна* は (6a) 及び (6b) の両方で同じ動詞形態をとっている。また、マケドニア語では後置定冠詞に格の区別はないので, *работа* 「仕事」に用いられる後置定冠詞はいずれも *-та* である。それでも, *започна* は, (6a) では他動詞として, (6b) では自動詞として用いられていることが明確である。やはり、マケドニア語でも他動詞と自動詞との形態的な区別が曖昧な動詞が存在するわけだが、ブルガリア語と異なるのは、それにより意味が曖昧になることを妨げている要素が、目的語に限って二重使用される人称代名詞接語形の存在なのである。(6a) では、定である直接目的語 *работата* 「その仕事」は、人称代名詞接語形の *ја* により重複されている。一方で, (6b) では *ја* による重複がない。すでに見たように、マケドニア語では定である直接目的語は義務的に接語重複がなされるため、接語重複の伴わない (6b) の *работата* を直接目的語としてみることはできず、むしろ動詞 *започна* の主語と判断される。このようにして、マケドニア語では接語重複された人称代名詞接語形により、他動詞か自動詞かの曖昧さはほとんどの場合において生じないことになる。ブルガリア語においても、接語重複により同様に意味の曖昧性の回避がされうるが、マケドニア語と異なり、接語重複の実現はすでに見たように「随意的」であり、定である直接目的語及びほとんどの間接目的語で接語重複が必ず実現するマケドニア語と比較すると、極

めて制限的となる。とはいえ、接語重複によって二重に使用される人称代名詞接語形は、当該の動詞が他動詞として用いられていることを形態的に示す要素となりうるだろう⁶。実際、Цыхун (1968: 86) も「他動詞性の形式的な標識となるのは、動詞に隣接しておかれる代名詞接語である。対格の接語形がないと当該の動詞は文中で非他動詞として現れる」と述べている。

以上の事から、マケドニア語にもブルガリア語にも、他動詞と自動詞が形態的に区別されないような動詞が存在するが、いずれの言語もある程度の場合において、それによって生ずる曖昧性を回避する手段が存在する。マケドニア語ではほとんど義務的な接語重複により、ブルガリア語では随意的ではあるがやはり接語重複により、主語と目的語の区別がなされるために、理解が保たれるのである。つまり、通常は自動詞の方が *ce* を伴って、形態的に有標となるのに対して、これらの場合では他動詞の方が重複する人称代名詞接語形によって有標となるのである。

以上の議論を踏まえると、とりわけマケドニア語におけるほとんど義務的に重複する人称代名詞接語形は、他動詞性を明示的に標示する機能を持っていると見ることができる。これを踏まえて次の議論に移る。

2.2.3. 多人称一致動詞

すでに 2.2.1. で見たように、マケドニア語において、人称代名詞接語形はプロクリティクな性質をもち、定形動詞では常に動詞に先行した位置を与格・対格の順で占め、常に後続する動詞と一つの韻律的なまとまりを形成する。また、2.2.2. で見たように、マケドニア語の動詞には、他動詞と自動詞が同一の形態をとるものがあり、その場合に曖昧性が生じるが、ほとんど義務的な目的語の接語重複により、その曖昧性は大方の場合回避される。以上の二つの特徴を踏まえると、人称代名詞接語形は、動詞において示される他動詞性の形態的な標示であり、動詞と人称代名詞接語形から成る動詞句というよりは、もはや動詞の語形変化の一種に近づいていると見ることができる (cf. Цивьян 1979: 207)。つまり、マケドニア語の他動詞は、主語との人称・数での一致は当然の事、目的語とも人称・数で一致して変化する、いわゆる多人称一致動詞 (polypersonal agreement verb)⁷ と見ることができると考えられる (cf. Aronson 1997: 38-39, 2004: 24-27, Friedman 2008: 40)。次の例を見てみよう。

(7) *My-go-dad-ov* [MK] (Aronson 2004: 24)

him.DAT.CL.-it.ACC.CL.-give-AOR.1.SG.

「私は彼にそれを与えた」

(7) において、動詞語幹 *dad* に対して、それに後続する位置に主語との一致を表す語尾 *-ov* が付され、それに先行する位置では順に間接目的語、直接目的語との一致を表す「語尾」*my-*, *go-* がそれぞれ付されているとみることで、動詞句を一つの多人称一致動詞として再分析できるのである。このような解釈の利点について Aronson (1994: 39) は次の二点を挙げている。まず、他動詞と自動詞の曖昧さの解消につながり、それから目的語接語重複の使用の形態統語的及び意味的な動機を提示することができるという。

一方で、ブルガリア語については、人称代名詞接語形の動詞に対して占める位置が、統語的な要因により決定され、マケドニア語のように一貫していないという点、また目的語の接語重複が極めて随意的であるという点から考えて、多人称一致動詞と解釈するよりはまだ動詞句と見る方が妥当であろう。とはいえ、ブルガリア語でも目的語の接語重複が広がりを見せていると考えられる例も見いだされ (cf. Сугаи 2012)、マケドニア語と同じ状況に向かう傾向を示していると考えられることはできる (cf. Aronson 1997: 38)。

さて、ここまでみてきたことを総合すると、少なくともマケドニア語においては、接語重複によって二重に使用される人称代名詞接語形は、独立した代名詞としてみるよりは、その音声及び形態統語的な特徴から言って、他動詞性を形式的に標示する動詞接辞として再分析することができる。これはまさしく、Heine & Kuteva (2005) の言う文法化のパラメーターのうちの脱意味化と脱カテゴリー化である。一方、マケドニア語におけるこの状況と比して、ブルガリア語は明らかに脱意味化及び脱カテゴリー化の点ではまだ低い段階にある。換言すれば、ブルガリア語の方が文法化の程度は低い状況にあるのである。

2.2.4. 再分析のプロセス

前節から、マケドニア語では二重使用される人称代名詞接語形は再分析が進み、動詞における他動詞性の形式的な標識として再分析可能であるが、ブルガリア語ではその段階には到達していないという事を示した。本節では、このような人称代名詞接語形の再分析がどのように始まり、進行していくのかという点に関して確認したい。類型論的なアプローチから取り組んだ Givón (1976: 156-157) によれば、トピック化して文中で前方に移動した目的語は、前方照応的な人称代名詞で再標示されるが、その人称代名詞が経る再分析のプロセスは次の (8) のようになるという。

- (8) a. The man, I saw him. (marked) 'him' の語彙性 + 'the man' のトピック性 +
 ↓
 b. I saw him, the man. (semi-marked) 'him' の語彙性 ± 'the man' のトピック性 ±
 ↓
 c. I saw-him the man. (demarked) 'him' の語彙性 — 'the man' のトピック性 —

上記 (8) のようなプロセスをたどって、代名詞 him は本来の代名詞としての意味から、動詞における一致標識に再分析されることになる。これは、Heine & Kuteva (2005) の言う文法化のパラメーターのうち、脱意味化と脱カテゴリー化に加え、本来の代名詞が接語 (clitic) 的な特性を獲得し、それを経て動詞接辞になる点でパラメーター (2d) 浸食 (音声的弱化) も加えることができよう (cf. Hopper & Traugott 2003: 142)。故に、ここではこれらの文法化のパラメーターがみられることからわかるように、人称代名詞 him の文法化のプロセスが提示されていることになる⁸。これと同時に、トピック化された目的語である the man は、再分析の過程で、トピック性の点で有標性を失い、最終的には本来の目的語として再分析される。この (8) のプロセスにマケドニア語とブルガリア語を当てはめるならば、マケドニア語はより (8c) に近い段階に到達している一方で、ブルガリア語は (8a) により近い段階にあると考えることができる (cf. Сугаи 2012)。

またこれと同時に、類型論の研究から導き出された(8)のプロセスからわかるのは、目的語の接語重複は、もともと目的語をトピック化するという語用論的な機能を持った統語的現象から始まっているということである。この際、ブルガリア語の目的語接語重複の特徴をここで再び想起したい。ブルガリア語では、目的語の接語重複が実現するためには、一般的にはその目的語がトピックであることが必要な条件であった。つまり、ブルガリア語がまだ(8a)により近い段階にあることは、ブルガリア語の目的語接語重複に見られる用法の特徴からも示されているといえるであろう。同時に、マケドニア語が目的語のトピック性とは関係なく、文法的に接語重複が行われるという事実は、(8c)に近い段階にあることを示唆している。

ここで示したように、目的語の接語重複は、元来的には目的語をトピック化するような語用論的なディヴァイスとして始まり、それが人称代名詞接語形の再分析を経て、文法的な一致標識になることで、文法的なディヴァイスに発展するというプロセスをたどる(cf. Friedman 1994: 105, 109)。そして、マケドニア語とブルガリア語は、目的語接語重複という現象に関して、その両極端の位置をそれぞれ占めていると考えられるのである。

本章では、マケドニア語とブルガリア語における目的語接語重複について、文法化の観点から中心に論じた。目的語接語重複は、目的語をトピック化する語用論的なディヴァイスとしてはじまり、二重に使用される人称代名詞接語形が、代名詞から単なる文法的な一致標識に変化するという再分析を経て、文法化に至る。再分析の過程では、文法化のパラメーターである人称代名詞接語形の脱意味化と脱カテゴリー化を伴うので、明らかに文法化が関与していると考えられる。さて、マケドニア語の目的語接語重複は、目的語のトピック性とはほとんど関わりがなく実現されることから、極めて再分析が進んだ状況にある。他方、ブルガリア語の場合は、目的語のトピック性は大いに関与しているため、まだ再分析があまり進んだ状況にあるとは言えないであろう。これは、文法化の程度の違いに換言でき、マケドニア語の方がブルガリア語に比べて文法化がより進んだ状況にあるといえることができる(cf. Лопашов 1978: 124)。

3. 方言での実態

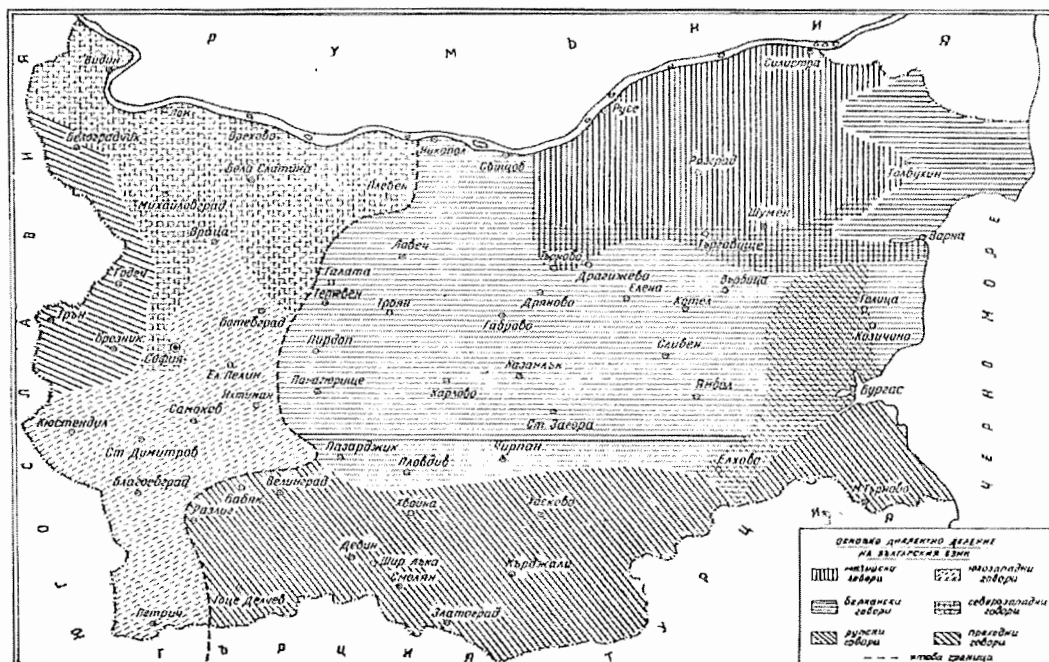
前章において、マケドニア語とブルガリア語の目的語接語重複は、文法化の程度において大きな相違点があることを見た。しかし、なぜもともと方言連続体を成し、最も近い関係にあるマケドニア語とブルガリア語が、この現象の表れの点ではここまでの差異が生じたのであろうか。我々がここまで扱ってきたのは、いわゆる標準語であるが、この二つの言語の方言に目を向けると、文法化の程度の点で、様々な段階にあるものが見えてくる。以下では、この方言におけるヴァリエーションの分布と標準語における相違点との関係について検討する。またその際に、文法化をもたらす要因の一つとしての言語接触についても言及する。

3.1. ブルガリア語及びマケドニア語の方言区分

マケドニア語及びブルガリア語が話されている地域では、様々な方言が見られる。まずは、ブルガリア語とマケドニア語の方言の分類を見ていこう。

ブルガリア語は、伝統的にはヤットの境界線(ятова граница)をはさんで、東方言と西方

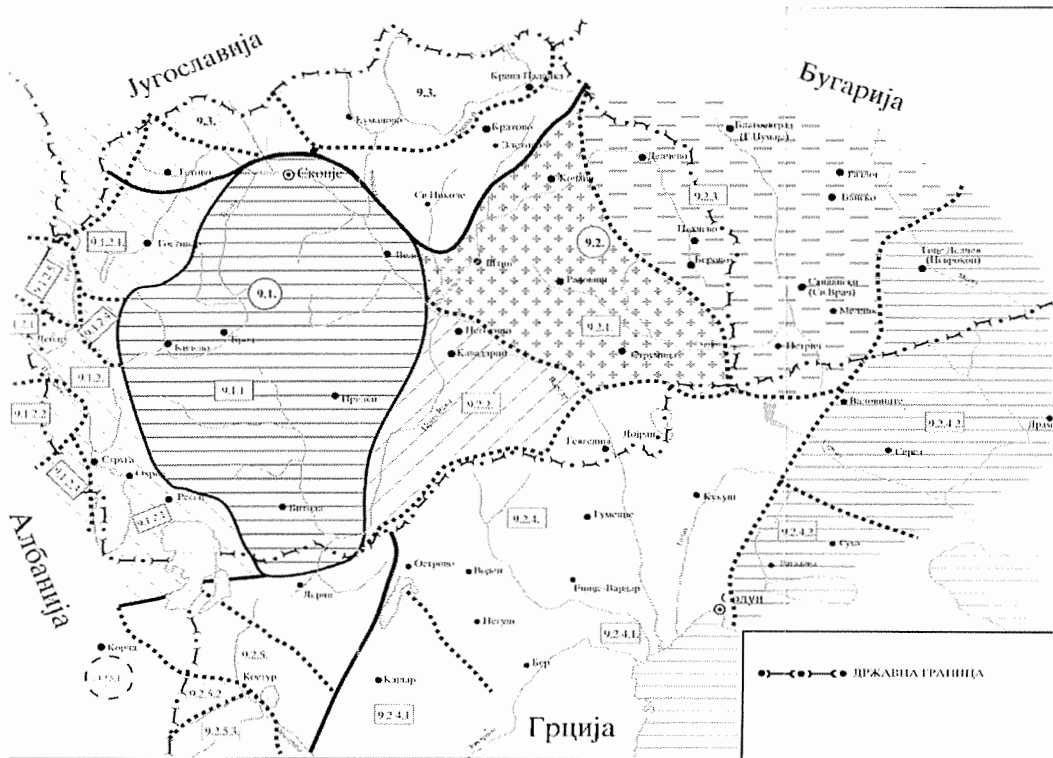
言に分類される。ヤットとは、古代教会スラヴ語にて □ であらわされる母音のことで、これが現代ブルガリア語諸方言でどのような音で対応しているかで、ブルガリア語諸方言を分けるのがヤットの境界線である。ヤットの境界線は、地図 1「ブルガリア語方言地図」中で、中央から少し左を北から南にかけてはしる点線であらわされている。このヤットの境界線の西では、母音 □ は常に [e] で現れる。その一方で、それより東では、[a] または [e] で対応する。ただし、東方言中の北東方言では [a] と [e] の両方が、現れる音環境によって相補分布的に対応するが、南東方言では常に [a] のみが対応する (cf. Стойков 2002: 83-85)。



地図 1：ブルガリア語方言地図 (Стойков 2002: 416)

さて、地図 1 は大まかなブルガリア語方言の分類を示した地図である。この中で、東方言中の中央に分布する方言であるバルカン方言（横線で示されている部分）は、標準ブルガリア語の基盤ともなった方言である。また、西方言中の南西方言（右上から左下に向かって点線で示されている部分）は、隣国マケドニア（旧ユーゴスラヴィア）共和国と隣接する方言地帯であり、実際にマケドニア共和国の南東方言と共通する言語特徴を多く共有する。

一方、マケドニア語は、西方言、南東方言、北方言の 3 つの方言区分がなされる (Видоєвски 1970)。地図 2「マケドニア語方言地図」中の、黒い太線はそれらの方言区分を分ける境界線である。このうち、西方言は、中央方言（横線で示された 9.1.1. の部分）と西境界方言（左上から右下にかけての斜線で示された 9.1.2. の部分）とに下位分類される。このうち前者は、標準マケドニア語の基盤となった方言である。南東方言は、言うまでもなく、ブルガリア語の南西方言と共有する特徴が多い。また、ブルガリア語の西方言の特徴である □ の [e] での対応については、一般的にはマケドニア語全域で同様の対応を有する。



地図2：マケドニア語方言地図 (Видоевски 1998)

3.2. 接語重複の地域的な分布

3.2.1. 先行研究

すでに述べたように、ブルガリア語とマケドニア語は様々な方言区分がなされるわけであるが、我々が注目している目的語の接語重複は、それぞれの方言ごとで異なった表れをすることが知られる。いくつか先行研究の指摘を整理しよう。

まず、ブルガリア語では、目的語接語重複はすべての方言に見出される現象であるが (Стойков 2002: 261)、アカデミー文法である Попов et al. (1983: 187) は、それが特に西方言に特徴的であると指摘し、Мирчев (1963: 224) も同様のことを述べている。したがって、目的語接語重複は、ブルガリア語諸方言中では東方言よりも西方言においてより頻繁であるという同現象の方言的な差異が読み取れる。

他方、マケドニア語は、古くは Селищев (1918: 250) の指摘に見出すことができ、それによると目的語接語重複はマケドニアの諸方言に特徴的な現象であり、彼は目的語接語重複を「典型的なマケドニア的特徴」とみなしている。しかしその一方で、ヴァルダル川の東に位置する地域の方言では、その「典型的なマケドニア的特徴」が見られないことがあるという。ヴァルダル川は、北の方ではおおよそ西方言の東の境界線に沿っていることを踏まえると、西方言では極めて一般的な現象である一方で、東方言ではそれよりは頻度が少ない現象である事実が伺える。この事実に関して、Видоевски (1960/61: 23) では「西方言における二重目的語の使用は規則的な現象である」と述べられているのに対して、Видоевски (1960/61: 26) で「東マケドニアの諸方言では二重目的語の使用は非一貫的であることを指摘しなければな

らない」と述べていることから分かる。故に、マケドニア語では、大まかに西方言では目的語接語重複は規則的である一方で、東方言では必ずしもそうではないというような方言間での同現象の表れの違いを見出すことができよう。

これらの事実は、目的語接語重複という現象に関しても、マケドニア語南東方言からブルガリア語南西方言にかけての連続性があることを示唆している。マケドニア語とブルガリア語を方言連続体として一つのまとまりとしてみた場合、目的語接語重複は、より規則的な様相を呈する南西（マケドニア語西方言）から、それよりはその実現が非一貫的である東マケドニア及びそれと地理的に連続する南西ブルガリアを経て、よりまれな現象となる北東（ブルガリア語東方言）まで連続体を成していることが伺える。またこれを換言するならば、南西では目的語接語重複はより文法化が進行しており、その程度が高い一方で、北東ではそれに比して文法化の程度は低いという状況にあると見ることができる。

3.2.2. 「バルカン諸語の小方言地図」による分析

さて、この事実について、今度は Соколев et al. (2005) による「バルカン諸語の小方言地図」をもとにより詳細に見ていきたい。これはバルカン諸語を対象としているが、我々がここで関心を持っているのはマケドニア語とブルガリア語なので、地図中で着目する地点は以下の三点に絞ることとする。

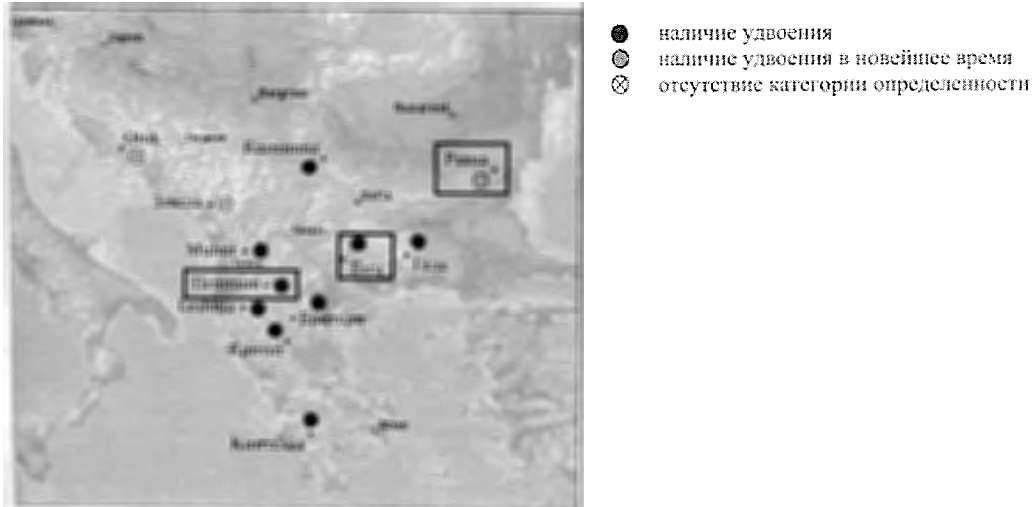
- (9) a. Пештани (ペシュタニ) : マケドニア共和国、オフリド地方 (南西地域)、
西マケドニア方言
b. Гега (ゲガ) : ブルガリア共和国、ピリン・マケドニア (南西地域)、
南西ブルガリア方言
c. Равна (ラヴナ) : ブルガリア共和国、ミジヤ (北東地域)、
北東ブルガリア方言

これら三点の地点は、南西の (9a) から、両国の国境に近い中間地点 (9b) を経て、北東の (9c) まで、マケドニア語とブルガリア語の方言連続体中の主要な段階を踏まえた地点となっている。上で述べた事実を踏まえると、目的語接語重複は (9a) から (9c) にかけてまれな現象になっていくことが仮定される。

以下では、目的語のタイプの違いや、動詞に対する位置の違いで、目的語接語重複が、それぞれ (9a) ~ (9c) の地域の方言において実現されるかどうか、またどの程度実現するかということを検討していく。その際には、定 / 不定の対立や、動詞に対する目的語の前置 / 後置の対立、また直接目的語 / 間接目的語の対立が考慮されている。これらいずれの要素もトピック性との関わりを論じる際に重要である。類型論的な研究の成果から、不定に対して定が、後置に対して前置が、よりトピックになりやすいことが知られるためである (cf. Givón 1976 etc.). ここでは、目的語接語重複の文法化の程度が高いものほど、これらのトピック性のパラメーターに関係なく、一貫して接語重複が実現することが考えられる。その一方で、目的語接語重複の文法化の程度が低いものほど、接語重複の実現は、それらトピック性のパラメーターに左右されやすく、トピックになりやすいような場合（上で言えば、定であったり、動詞に対して前置される場合）には接語重複が実現、あるいは許容されるが、そうでな

いものでは接語重複がそもそも実現されないと考えられる。

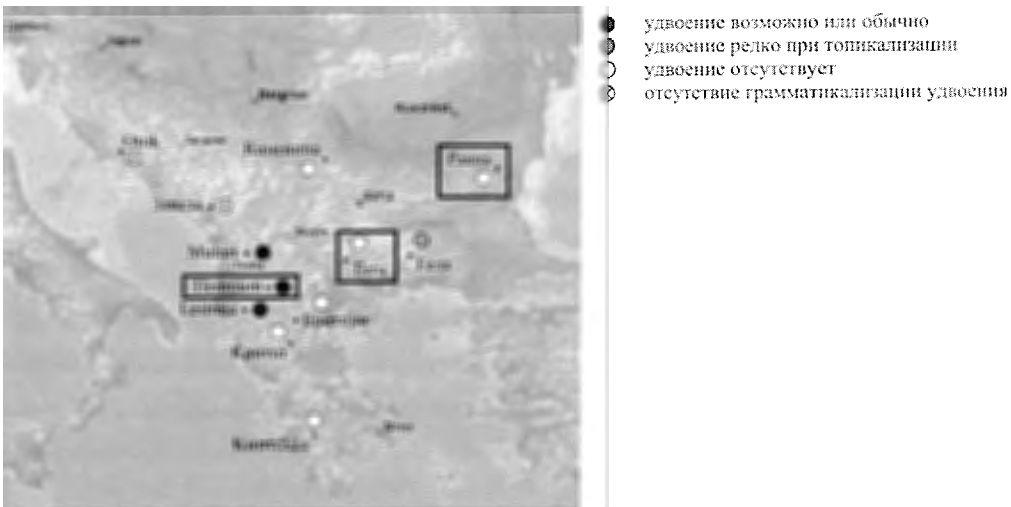
それではまず、地図3「定の名詞であらわされた直接目的語の重複」を見てみたい。



地図3：定の名詞であらわされた直接目的語の重複 (Соболев et al. 2005: 93, карта №38)

この場合に、前置か後置かの区別はない。目的語の接語重複は、西マケドニア方言に属するペシュタニの方言 (9a) 及び、南西ブルガリア語方言に属するゲガ (9b) の方言においては見られ、両方言は並行している。他方、北東ブルガリア語方言に属するラヴナ (9c) の方言においては、接語重複は現代に限って見られると指摘されている。

次に地図4「不定の名詞であらわされた直接目的語の重複」を見る。

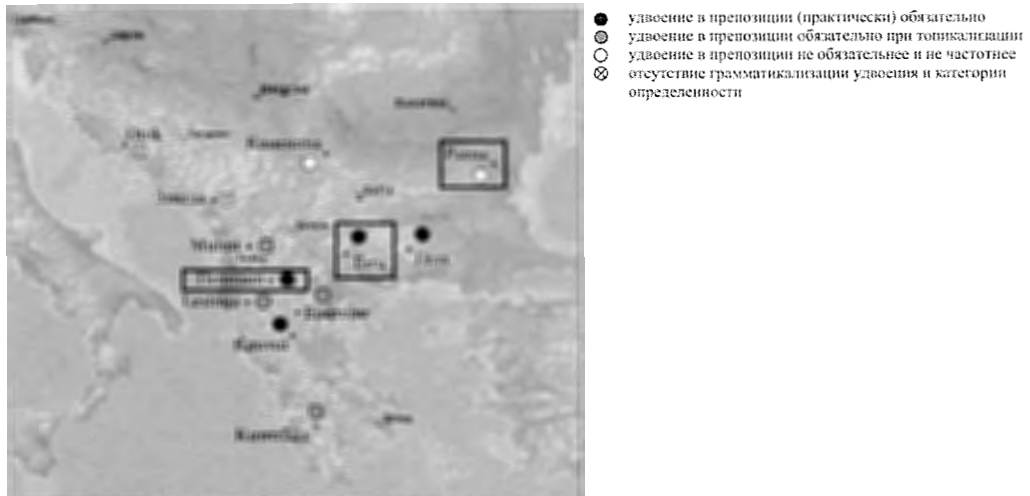


地図4：不定の名詞であらわされた直接目的語の重複 (Соболев 2005 et al.: 103, карта №43)

この場合、前置か後置かの区別はない。目的語接語重複は、西マケドニア語方言のペシュタニ (9a) においては可能あるいは通常であるのに対して、南西ブルガリア語方言のゲガ (9b) 及び、北東ブルガリア語方言のラヴナ (9c) では接語重複は不在であるという。

次に、地図5「動詞に対して前置された定の名詞であらわされた直接目的語の重複の義務

性」を見る。



地図5：動詞に対して前置された定名詞であらわされた直接目的語の重複の義務性 (Соболев et al. 2005: 113, карта №48)

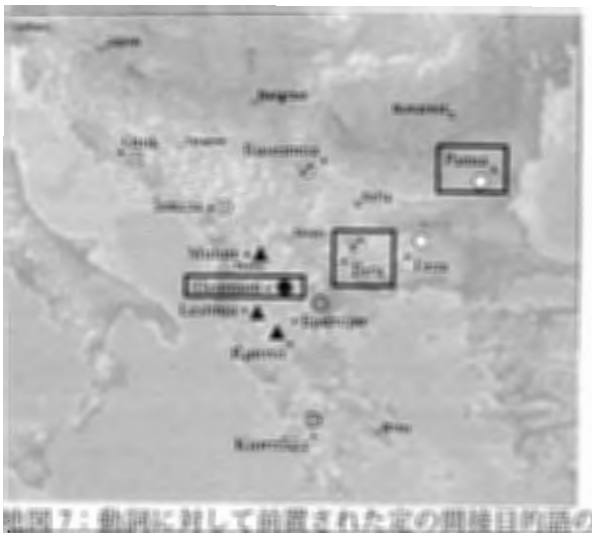
この場合、西マケドニア語方言のペシュタニ (9a) 及び、南西ブルガリア語方言のゲガ (9b) では、定の目的語が前置される場合には、接語重複は事実上義務的であるとされる。他方、北東ブルガリア語方言のラヴナ (9c) では、目的語が前置される場合であっても、接語重複は義務的ではない。



地図6：不定の名詞であらわされた間接目的語の重複 (Соболев et al. 2005: 135, карта №59)

この場合、前置か後置かの区別はない。目的語の接語重複は、南西マケドニアのペシュタニ (9a) 及び南西ブルガリアのゲガ (9b) では通常であるのに対して、北東ブルガリアのラヴナ (9c) では不在である。

最後に、地図7「動詞に対して前置された定の間接目的語の重複の義務性」を見る。



- ▲ удвоение обязательно независимо от порядка слов
- при синтетической форме косвенного объекта
- при аналитической форме косвенного объекта
- удвоение в препозиции
- обязательно при тонизации
- возможно
- отсутствует
- ⊗ отсутствие грамматикализации удвоения и категории определенности

地図7: 動詞に対して前置された定の間接目的語の重複の義務性 (Соболев et al. 2005: 137, карта №60)

この時、(9a)～(9c)の間でそれぞれ違いが見られる。西マケドニア語方言のペシュタニの方言(9a)では、この場合の接語重複は、動詞の語順に関係なく義務的である。南西ブルガリア語方言のゲガの方言(9b)では、目的語が動詞に対して前置される場合に可能となる。また、北東ブルガリア語方言のラヴナの方言(9c)では、目的語が動詞に対して前置される場合であっても、目的語の接語重複は不在である。

この方言地図によれば、南西マケドニア地域であるペシュタニ(9a)における目的語接語重複は、どのような条件下でも、接語重複は一貫して行われる。他方、南西ブルガリアのピリン・マケドニアに位置するゲガ(9b)における南西ブルガリア語方言は、地図3, 5, 6では、南西マケドニアのペシュタニと並行しており、目的語接語重複は行われる。しかし、地図4, 7では、それとは異なる様相を呈している。地図4の不定の直接目的語の接語重複に関しては、接語重複が行われることはなく、地図7の動詞に対して前置された定の間接目的語の場合では、接語重複は可能であるが、南西マケドニアのペシュタニの場合とは異なり義務的ではない。また、ペシュタニとは反対の意味で一貫した対応を見せたのが北東ブルガリア地域であるラヴナ(9c)における状況である。ここでは、目的語の接語重複はかなり周辺的な現象であることが読み取れる。ただし、地図3, 5で見られるように、定である直接目的語やそれが前置された場合には、接語重複は頻繁ではないが可能となることが示されている。

Соболев et al. (2005) の方言地図からは、目的語接語重複の方言における分布について次の二点が読み取れる。

まず第一に、南西マケドニア地域のペシュタニでは、目的語接語重複はいかなる条件下でも一貫して義務的、あるいは接語重複があることが通常である。しかしその一方で、北東ブルガリア地域のラヴナでは、目的語接語重複は一貫して周辺的な現象であり、多くの場合で接語重複は不在となるか、少なくとも義務性はない。また、その間を行くような様相を呈しているのが、両者の中間点にある南西ブルガリア地域のゲガの方言である。そこでは、北東ブルガリアのラヴナと比べると、接語重複はより規則的な印象を与えるが、南西マケドニア

のペシュタニに比べると、接語重複が不在となる場合も見受けられる。これらの結果は、言うまでもなく、すでに述べた傾向とはっきりと合致する。すなわち、マケドニア語とブルガリア語を一つの方言連続体としてみたときに、南西マケドニア地域で行われる西マケドニア語方言において最も接語重複が一般的であり、逆に北東ブルガリア地域で行われる北東ブルガリア語方言において最もまれな現象であるという傾向である。

第二に、ペシュタニなど南西マケドニア地域では、語用論的な要因が接語重複の有無に影響を与えない。それはすなわち、目的語がトピックであるかどうかということは関係がないという事である。このことは、目的語の動詞に対する位置や、目的語が定であるか不定であるかというようなことに関わりなく、目的語接語重複が一貫して実現されるということから判断できる。その一方で、ラヴナなど北東ブルガリア地域では逆に、これら語用論的な要因が接語重複の有無に関与することがある。例えば、直接目的語が不定である場合には接語重複は不可能であるが（地図4）、トピックになりやすい要素である定である場合には存在するという（地図3）。また、ゲガなど南西ブルガリア地域でも、語用論的な要因が接語重複の有無に影響しており、トピックになりやすい要素が関与するときに接語重複が可能になりやすいという傾向が見て取れるが（地図4の不定に対して地図3の定ならば可能なことや、地図7にあるように動詞に対して前置されれば可能なこと）、北東ブルガリア地域のラヴナと比べると、接語重複は広範の場合で義務的であったり、可能であったりする。これは明らかに、南西マケドニアでは目的語の接語重複の文法化の程度が高い一方で、北東ブルガリアでは接語重複の文法化の程度が低く、かなりの程度談話的な制約を受ける語用論的なディヴァイスにとどまっていることを示しているといえる。

故に、本節からは次のことが明らかにされた。マケドニア語及びブルガリア語における目的語接語重複は、標準語とは異なり、地域方言のレベルでは、その文法化の程度に関して様々な差異が見られる。より具体的には、南西マケドニア地域において目的語接語重複は最も文法化が進んでおり、そこから北東ブルガリア地域に向けて徐々に文法化の程度が低くなり、北東ブルガリア地域の方言では最も文法化の程度が低いというような分布が得られる。そして、まさにこの方言の分布の中に、目的語接語重複の文法化の発展のプロセスを見出すことができる（語用論的なディヴァイス～統語論的なディヴァイス⁹～文法的なディヴァイス）。すなわち、目的語のトピック化が関わる語用論的なディヴァイスとしての目的語接語重複を持つ北東ブルガリア語方言から、人称代名詞接語形が動詞の他動詞性の形態的な標識という文法的なディヴァイスに極めて近い状況まで発展したと見ることができる西マケドニア語方言まで、文法化の様々な段階が方言に表れていると見ることができるのである。

3.3. バルカンの多言語環境の中心地としての南西マケドニア

すでに前節で見たように、南西マケドニアは、マケドニア語及びブルガリア語の方言連続体中で、目的語接語重複の文法化が最も進んだ地域である。なぜこの地域において、目的語接語重複の文法化が進んだのだろうか。それを考えるうえで、この地域の特殊な状況に目を向ける必要がある。

バルカン半島の中でも、マケドニアは、オスマン帝国支配下の時代以来、民族の混住地域の典型として知られる。例えば、柴 (2006: 93) によると、「この地域（本稿執筆者注：現在

のマケドニア共和国が該当するヴァルダル・マケドニアのみならず、現在ブルガリア共和国に所属するピリン・マケドニアや、ギリシアに所属するエーゲ・マケドニアなどすべてを含めた歴史的な「マケドニア」全域を指している）の住民は言語面からみても宗教上も、きわめて多様であった。＜中略＞多い順に列挙すると、住民はスラヴ人、トルコ人、ギリシア人、アルバニア人、ヴラフ、ユダヤ人、ロマなどであり、概して混住していた（下線部は本稿執筆筆者による）。なかでもとりわけ、現在のマケドニア共和国の南西地域は、バルカンの多言語環境の中心地として知られ、マケドニア語、アルバニア語、アルーマニア語の話者が、南西マケドニアという比較的狭い地域に混住しており、数世紀にもわたるインテンシヴな言語接触を経験してきた（Lindstedt 2000, Friedman 1994, 2008 etc.）。

このような事実を踏まえたうえで、目的語接語重複に目を向けてみたい。バルカン諸語の諸方言を対象に目的語接語重複の研究を行った Friedman (2008: 59) は、西マケドニアの地域に被さるように分布する、マケドニア語西方言、アルーマニア語北方言、アルバニア語ゲグ方言に見られる諸特徴は、単なる並行的な発展とするにはあまりに類似しすぎている事実を指摘し、これが言語接触によってもたらされた地域的な現象であると論じている。多言語話者の混住地であるかつてのバルカンでは、絶対的なリングワ・フランカが認められず、個々人が、自身のグループのアイデンティティの象徴としての母語以外に、複数の言語を十分な程度身に着けていたという社会言語学的な情勢が存在していたことが知られている（Lindstedt 2000: 238-241）。このような状況下で、異なった言語の母語話者同士が、意思疎通を図る際に、より明確な相互理解のために明示的な標示を伴う文法・統語構造を志向したことは想像に難くない。元々語用論的なディヴァイスである目的語接語重複が、より明確な相互理解に貢献しうる文法的な特徴へと発展していったことは十分に考えうる（cf. Friedman 1994: 109, 2008: 59, Lindstedt 2000: 241 etc.）。つまり、南西マケドニア地域の西マケドニア語方言における目的語接語重複は、インテンシヴな言語接触によって、その文法化が促進されたと考えられるのである。北東ブルガリア地域と比べて圧倒的な多民族混住地域で多言語環境である南西マケドニア地域において接語重複が最も文法化が進んでいる事実は、言語接触が目的語接語重複の文法化の促進に際して果たした役割が少なくないことを十分に示唆していると言えよう。これと関連して、目的語接語重複もその一つとして考えられているバルカン言語圏現象自体が、長期間にわたる多言語環境における言語接触によってもたらされたとすることや（cf. Lindstedt 2000 etc.）、一般的にも言語接触により文法化などの言語変化が引き起こされやすいことはよく知られている（cf. Heine & Kuteva 2005 etc.）。さらには、バルカンの中でも南西マケドニアがバルカン言語圏現象の中心地であることは、例えば Lindstedt (2000: 234) や Tomić (2006: 28) など少なくない研究者が言及してきており、またその地域のそれぞれの言語の方言同士の方が、標準語同士よりも酷似しているということを指摘している点についてもまた、留意すべきであろう。

4. おわりに

本稿では、ブルガリア語及びマケドニア語の標準語や方言における目的語接語重複を文法化の観点から分析し、次の二点を論じた。

第一に、ブルガリア語とマケドニア語の標準語は、目的語接語重複の表れの点で大きな相

違点があるが、両言語における同現象を比較しながら、それがどのように文法化されているか分析した。マケドニア語では、目的語接語重複はかなり義務的に行われる。その際に二重使用される人称代名詞接語形は、代名詞というより語彙的な形式が、統語的に予測可能な一致標識という文法的な形式、あるいはほとんど動詞において他動詞性を標示する一種の接辞というより一層高度に文法的な形式へ発展しているものと見ることができる。その一方で、ブルガリア語では、目的語接語重複の実現に際して談話的な制約が強く、それ自体語用論的なディヴァイスにとどまっており、マケドニア語が到達したような文法化の程度まで進んでいない。

第二に、ブルガリア語とマケドニア語は方言連続体を成すことが知られるが、その諸方言では目的語接語重複のあらわれ方が異なり、したがってその文法化の度合いも異なるわけだが、それがどのような分布を成すかについて、方言地図を検証しながら分析を行った。それによると、目的語接語重複は、南西マケドニアにおいては、どのような条件下でも接語重複がほとんど一貫して行われるのに対して、北東ブルガリアでは、トピックと関連する要素がかかわる場合には接語重複が行われやすくなる傾向が多少見られるが、全般的にはその実現はかなり制限的である。他方、両者の中間地点に位置する南西ブルガリアでは、北東ブルガリアに比べるとかなり接語重複は義務性が高いが、南西マケドニアと比べると、一部制限的な傾向も見られる。故に、北東ブルガリアでは語用論的な要素が接語重複の実現に際して大きな意味を持つのに対して、南西マケドニアではそのような要素とは関わりなくほとんど義務的に接語重複がなされることがわかった。つまり、目的語接語重複の表れは方言のレベルでは多様であるばかりでなく、それは北東から南西にかけて段階的に文法化の程度が高くなるような様相を呈することが確認された。また、最も文法化の程度が高くなる南西マケドニアが、バルカン随一の多民族多言語環境であり、オスマン帝国支配下の時代から数世紀にもわたって緊密な言語接触が行われてきているという事実などから、言語接触が目的語接語重複の文法化を促進した要因の一つである可能性を指摘した。

以上の本稿での議論を踏まえて、今後の展望を示す。

南西マケドニアから北東ブルガリアにかけての文法化の度合いの違いによる目的語接語重複のヴァリエーションの分布によると、北東ブルガリアにおいては、目的語接語重複はかなり制限的であることが本稿の分析から確認できた。北東ブルガリアから、2世紀近く前にドナウ川を越えてルーマニアに移住したブルガリア人の中には、いまだにブルガリア人のアイデンティティを持ち、自分たちのブルガリア語の方言を保持する人々がわずかながら残っている (cf. Младенов 1993, 菅井 2012a, 2012b)。これらルーマニアに移住したブルガリア人たちは、この2世紀近くの長い年月の間、数世代にわたって彼らのブルガリア語方言を保持してきたが、それは当然ながら当地の公用語であるルーマニア語との言語接触にさらされてきた。故に、彼らの話すブルガリア語北東方言における目的語接語重複は、より文法化の程度が高いことが知られるルーマニア語との言語接触を通して、ブルガリア国内の北東方言よりも文法化が進んでいることが仮定される。今後は、この点について詳しい検証を行っていくことで、言語接触と文法化の関連性についてより詳細に検討していく必要があるであろう。

参考文献

- Асенова, П. (2002) *Балканско езикознание: основни проблеми на балканския езиков съюз*. Велико Търново: Faber.
- Видоевски, Б. (1960/61) Основни дијалектни групи во Македонија. *Македонски јазик*. 11/12, 12-32.
- _____ (1970) Дијалектна диференцијација на македонскиот јазик. *Пристапни предавања, прилози и библиографија на новите членови на Македонската академија на науките и уметностите*, 27-39.
- _____ (1998) *Дијалектите на македонскиот јазик*. Том 1. Скопје: МАНУ.
- Конески, Б. (1967) *Граматика на македонскиот литературен јазик*. Дел I и II. Скопје: Култура.
- Лопашов, Ю. А. (1978) *Местоименные повторы дополнения в балканских языках*. Ленинград: Наука.
- Манова-Ѓуркова, Л. (2000) *Синтакса на македонскиот стандарден јазик*. Скопје: МАГОР.
- Маслов, Ю. С. (1982) *Граматика на българския език*. София: Наука и изкуство.
- Мирчев, К. (1963) *Историческа граматика на българския език*. София: Наука и изкуство.
- Попов, К. et al. (1983) *Граматика на съвременния български книжовен език*. Том III. Синтаксис. София: Издателство на БАН.
- Селищев, А. М. (1918) *Очерки по македонской диалектологии*. Казань: Лито-Типография Т-во «Умид». (Реп. Селищев, А. М. (1981) *Очерци по македонската диалектология*. Фототипно издание. София: Наука и изкуство.)
- Соболев, А. Н. et al. (2005) *Малый диалектологический атлас балканских языков*. Том I. Категории имени существительного. München: Biblion Verlag München.
- Стойков, Ст. (2002) *Българска диалектология. Четвърто издание (фототипно)*. София: Печатница на Академично издателство «Проф. Марин Дринов».
- Сугаи, К. (2012) Удвояване на допълнението и фокусът в българския език. *Време и история в славянските езици, литератури и култури*. Том първи. *Езикознание*, 55-62.
- Цивьян, Т. В. (1965) *Имя существительное в балканских языках*. Москва: Наука.
- _____ (1979) *Синтаксическая структура балканского языкового союза*. Москва: Наука.
- _____ (1968) *Синтаксис местоименных клитик в южнославянских языках*. Минск: Наука и техника.
- Aronson, H. I. (1997) Transitivity, Reduplication, and Clitics in the Balkan Languages. *Balkanistica*. vol. 10, 20-45.
- _____ (2007) *The Balkan Linguistic League, "Orientalism," and Linguistic Typology*. Ann Arbor/ New York. Beech Stave Press.
- Franks, S. & King, T. H. (2000) *A Handbook of Slavic Clitics*. New York: Oxford University Press.
- Friedman, V. A. (1994) Variation and Grammaticalization in the Development of Balkanisms. *CLS* 30. vol. 2, 101-115.
- _____ (2008) Balkan object reduplication in areal and dialectological perspective. *Clitic Doubling in the Balkan languages*, 25-63. Amsterdam: Benjamins.
- Givón, T. (1976) Topic, pronoun and grammatical agreement. *Subject and topic*, 149-188. New York: Academic Press.
- Guentchéva, Zl. (1994) *Thématisation de l'objet en bulgare. Nouvelle édition, revue et corrigée*. Bern: Peter Lang.
- Heine, B. & Kuteva, T. (2005) *Language Contact and Grammatical Change*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Hopper, P. J. & Traugott, E. C. (2003) *Grammaticalization. Second Edition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leafgren, J. R. (1997) Bulgarian Clitic Doubling: Overt Topicality. *Journal of Slavic Linguistics* 5, 117-143.
- Lindstedt, J. (2000) Linguistic Balkanization: Contact-induced change by mutual reinforcement. *Studies in Slavic and General Linguistics. vol. 28. Languages in contact*, 231-246.
- Tomić, O. M. (2006) *Balkan Sprachbund Morpho-syntactic Features*. Dordrecht: Springer.
- (2008) Towards grammaticalization of clitic doubling. *Clitic Doubling in the Balkan Languages*, 65-87.
- 柴宜弘 (2006) 『図説バルカンの歴史 (改訂新版)』 東京: 河出書房新社
- 菅井健太 (2012a) 「ブルガリア語方言における定語の語順に関する一考察 — ルーマニア・ブラネシュティ村の方言を例に —」 『スラヴ文化研究』 vol.11. 98-135. 東京外国語大学ロシア語研究室
- (2012b) 「ブルガリア語方言における目的語の接語重複と前置詞 *pă* について — ルーマニア・ブラネシュティ村の方言を例に —」 『日本スラヴ学研究会 2012 年度研究発表会ハンドアウト』
- 野町素己 (2011) 「スロヴェニア語の構文「*dobiti* + 受動過去分詞」について — 文法化の観点からの分析と試論 —」 『西スラヴ学論集』 Vol.14. 30-51. 日本西スラヴ学研究会

註

- 例文において、接語重複している目的語と、それと同一指示の人称代名詞を下線で表示する。その際、与格は細い下線で、対格は太い下線で示す。例 (3) に限っては、人称代名詞接語形の固まり (与格と対格) に点線を、動詞に波線を付す。また、例文において () の前後にアスタリスクが用いられている場合がある。*() となっている場合には () 内の語がないとその文が非文となることを意味し、(*) となっている場合には () 内の語があるとその文が非文となることを意味する。アスタリスクがない例文中の () は、() 内の語の有無が随意的であることを意味する。また、例文にはグロスと和訳を付す。ただし、グロスは必要なものを中心につけ、すべての文法要素についてつけるわけではない。グロスで用いる略語は次の通り。
ACC.= accusative case, AM.= accusative marker, AOR.= aorist, CL.= clitic, DAT.= dative case, DEF.= definite article, DM.= dative marker, EVD.= evidential mood, F.= feminine, FUT.= future tense marker, IMPF.= imperfective tense, IMPV.= imperative mood, M.= masculine, N.= neuter, NOM.= nominative case, OBQ.= oblique case, PL.= plural, PRES.= present tense, SG.= singular, SMP.= subordinating modal particle
- ただし、文法的に条件づけられた目的語接語重複もまた、一般的には随意的とされる標準ブルガリア語において存在する。このタイプの接語重複は、一般的には次のタイプの述語を伴った場合に起こる: 対格 / 与格の経験者 (experiencer) の項を要求する心理・身体的状態を表す述語、モダルな述語、存在 / 不在を表す述語 (cf. Krapova & Cinque 2008 etc.)。例えば次の例において、二重使用されている人称代名詞短形を抜かすことはできない。
i) Мене (*ме) боли главата.
me.ACC. me.ACC.CL. hurt.PRES.3.SG. head+the
「私は頭が痛い。」
- 本稿では一般的に受け入れられている考え方に従い、トピックとは、その文や発話において述べられている話題をあらわすものとする。

4 ただし、疑問の助詞である *ли* がかわる場合には必ずしもそうではない。例えば、次の例を見よ。

i) <i>Даваш</i>	<i>ли</i>	<i>ми</i>	<i>го?</i>
give.PRES.2.SG.	Q	me.DAT.CL.	it.ACC.CL.

「(君は) 僕にそれをくれますか。」

5 ブルガリア語やマケドニア語にとどまらず、バルカン諸語全体で同様の傾向がみられる (Лопашов 1978: 106-107)。

6 この事実を別の視点からとらえたものとしては、Tomić (2006, 2008) などがある。この場合の人称代名詞接語形、特に与格の場合には、それが重複している目的語の格標識であるとみている。

7 Цивьян (1979: 207) はそれを「目的語の活用」(объектное спряжение) と呼んでいる。ちなみに、Минова-Ѓуркова (2000: 207-208) もこれに従って объектна конјугација としている。

8 再分析は、野町 (2011: 33) も指摘するように、文法化のパラメーターとして有効である。というのも、再分析のケースの多くは、文法化のケースでもあるためである。ただし、注意すべきは、すべてがそうであるわけではないという事である (Hopper & Traugott 2003: 58-59)。例えば、(8) のプロセスの中で *the man* は、トピック化した目的語から、トピック性に関して無標な目的語に再分析されるわけであるが、文法化は伴っていない。

9 ここでは、語用論的なディヴァイスと他動詞性の文法標識の間を行く段階として示した。人称代名詞接語形が、動詞に対する完全な接辞になっているとまでは言い難いが、目的語との一致標識として、主語と目的語の区別の機能を持つ場合を意図した。